
不幸な俺の異世界戦記

神速の守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸な俺の異世界戦記

【Zコード】

N2725Y

【作者名】

神速の守

【あらすじ】

俺を襲った不幸は俺を地獄へと突き落とした。

しかし俺は誰を恨んでいいのかもわからない。

基本アホな主人公、一樹の美月を救うための旅が始まる
初投稿&処女作です。

プロローグ

俺を襲つた不幸は俺を地獄へと突き落とした。

しかし俺は誰を恨んでよいのかもわからない。

不幸はあの日、2人で下校していくときに起つた。

「ねえつてば一樹も許してよ。私が悪かったから許してよ・・・

「俺にちょっとだけ涙ぐみながら謝つてくれるのは幼馴染で同級生の
篠原美月だ。

「許さない」

俺、新崎一棄はそう答えた

「でも先生に追いかけられてたんだからしちゃうがないじゃない
んなこと知るかよ・・・

数時間前のことだ

数時間前

俺は学校の屋上で寝ていた。ほかのやつらは授業中だらつ。1時間目からずっと屋上で寝ている。いつものことだ。

ガチャツ

鉄製の重いドアの開く音がした。

見回りの教師か?それにしても早くのが早い。

携帯を見ながらそう思った俺はそっとドアのほうを見る。

「なんだ美月かよ、脅かすなよ、見回りかと思つ・・・え?」

「うちに走つてくる。

「一樹つ」

俺のほうまで来ると俺の後ろに隠れてしまつ美月
いやな予感しかしないんだが・・・と思つたときだ。
「篠原」いるのはわかつてんだぞーでてこーい！」

叫んでいるのは体育のセクハラ教師だ。

（やばい・・・俺見つかるとすぐやばい・・・逃げるかー）
あいつはエロい上にウザく話しうけたら止まらない。
あいつの視界の影からゆつくり逃げようとしていると三月が
「ちょっと助けてくれないのー？」

（バカつ声がでかい）

と思つたときにはすでに遅い。お約束だ。

「そこか！・・・新崎お前なにやつてるんだ？」

あーサイヤクだ。

「あーそのー・・・寝てました。」

その後1時間も俺はセクハラ教師に怒られた。

・・・美月は逃げていた。

「お前が来なかつたらバレなかつたんだよ、だから許せん
「そんなんあ許してよ一樹」

明日になれば許してやるか、などと思つていた。

今思えばこの時許していればよかつた。

「もう！一樹なんか知らない！先帰るー！」

「はーいはーい、また明日なー」

美月を先に帰らせず一緒に帰ればよかつた。

許さず先に帰らせてしまつた代償は・・・重すぎた。

プロローグ（後書き）

はろるんです。

これからも読もうと思つてくれた人たち ゆー シクです (、 、 、)
読もうと思わづともプロローグ読んでくれた人はありがとうございます

プロローグ2

「キヤー……………」

悲鳴だつた。それは俺がよく知る人物の悲鳴。
美月の声、悲鳴だつた。

「嘘だろ……」

俺は駆け出していた。

いつも美月と2人で下校している道を駆ける。

（何だよこれは……）

アスファルトに道の上に黒く輝く直径2mほどの円状の魔方陣。
そこに美月はいた。捕らわれていた。体が魔方陣に埋まつておりも
う肩より上と右腕しか見えていなかつた。

「美月！……」

俺は叫んで魔方陣の中に飛び込み美月の右手をつかむ。

（どうなつてんだよこれは……）

「今助けてやる！」

（どうすればいい、どうすれば……）

俺にはただ引っ張ることしかできなかつた。しかし魔方陣の中に美
月はますます沈んで入つた

もう顔と右腕しか出ていない美月は俺にこういつた

「もういい、一樹、ご……」

しかし何かを言いかけていた美月は魔方陣の中に沈み顔も見えず右
手も沈んでいく。

離すものか。離してしまつたら美月は消えてしまう……

だがついに握っていた右手も魔方陣の中に沈み込んだ。そして魔方
陣がさらに光魔方陣の外に波紋のように何かが広がつていく。10
秒ほどすると魔方陣は消え去り俺はアスファルトの上にしゃがみこ
んでいた。

「美月……どこに行つたんだよ。返事してくれよ……美月い

「いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

俺は叫んだ。泣き叫んだ。

周りに人が集まってきた。何事かと思っているのだろう。つかの人が叫んだ

「救急車だつ！誰か電話してくれ！！！」

一樹の体はかまいたちに斬られたかのように斬れていた。

血が流れ出していたが一樹はそんなこときずかず泣き叫んでいた。

目を覚ますと白い天井が見える。

「どうだ、ここ？」

体を起こそうとする。すると体に激痛が走る。

（ぐつ・・何だよの痛みは。）

何とか体を起こして自分の体を見る。包帯が巻かれていた。周りを見渡す。俺はベットの上に寝かされており腕には点滴の針が刺さっていた。

（病院なのか？でも何でこんなところにいるんだ。）

と思ったときだった。看護婦が部屋に入ってきた

「あつ 新崎さんからだ起こしちゃダメですよー今先生を呼んできますからつ。」

と言つと看護婦さんは部屋をでていつた。

先生が来て脈拍とかを測つた後黒いスーツを着た男の人に入ってきた。

「警察の西垣と言つものです。話を聞きたいのだががいいかな？（なぜ警察なんものが来ているんだ？）

「はい。話つて何ですか？ていうか何で俺こんなところにいるんですか？」

西垣さんは驚いた表情でこう言つた。

「君は学校の帰り道に何者かに襲われたんじゃないのかい？体にはいくつもの傷があつて君はしゃがみこんで叫んでいたと言つことなんだが。」

そういうわれて思い出した。

（美月。美月は！？）

「美月はどこですか！？」

「落ち着け！美月とは誰かね。君と一緒にいたのかい？」

「俺と美月が2人で帰つてちょっとと言い争つてそれで美月が先に行つて、突然叫び声が聞こえて、それで俺が走つて言つたときにはなんか黒い魔方陣のようなものに美月が吸い込まれていつて・・・それで美月を俺が助けようとしたけど・・・」

西垣がポカンとしていた。いま一樹が言つたことが信じられないのだ。当たり前だ、ここに来るまでに一樹の学校での関係等を調べたが美月と言つ名前は出なかつた。2人で帰るほどの中なら名前が出てきてもおかしくない。いや、出てこなければおかしいのだ。それ以前に魔方陣とかそんなものが出てくるといつのがおかしかつた。

「君は記憶が混乱しているようだ。本か何かで読んだんじゃないのか？その内容は？」

「本当なんです！美月が・・・」

「もういいよ。警察のほうで調べてみる。医者からの説明だとまいたちに斬られたような斬り跡だつたらしいし今日は風が強かつた」西垣はそう言つと病室から出て行つた

（そんないや、俺でもほかのやつからこんなことを聞いてもおかしいと思うか。どうにかしてあの魔方陣のことを調べないと）

そう思いながら

俺は2週間ほどの入院生活を過ごした。

プロローグ2（後書き）

西垣はもう出てこないんで記憶から消去しちゃつてもいいです！

今回もありでした。

誤字脱字あれば報告してくれるとありがたいです。

プロローグ③（前書き）

プロローグが終わらない。

プロローグ3

傷もふさがり退院した俺は美月の家に行つた。

「何だよこれ・・・」

表札のに書かれている文字が篠原ではなかつた。
(まさかラノベとかでよくある存在自体がなくなるつてやつか・・・
?)

念のためいきますんでいる人に篠原と言つ人を知らないかと聞いたが
知らないようだつた。

それならばと思い向かつたのは学校だ。

退院した日なので学校には行つていない。しかし誰かいるだらうとは思つた。

学校について向かつた先は職員室だ。担任を捕まえて美月を知つて
いるか。と言つた。
案の定美月のことは知らなかつた。

わかつていていたこととはいえ俺は更なる地獄へと突き落とされた気分
だつた

(美月どこにいるんだよ・・・)

おそらく美月はこの知地球にはいないだらう。あの魔方陣は魔法と
かそういう類のものに見えた。

と言つことであの魔方陣を俺は調べることにした。インターネット、
歴史の教師、そして図書館。俺の知識じやそれくらいしか思いつか
なかつた。歴史の教師は何の役にも立たなかつたがネットと図書館
は大いに役に立つた。

昔のことやら神話やらのことを中心に図書館の本は片つ端から読み

漁つた。ちなみに3週間は図書館に籠つた。当然学校はサボりだ。

図書館で調べた中本にこのような神話があった。

戦乱の中で黒く光る円が突如出現し何事もなく消え去る。しかし何人かの兵はあいつがいないと騒ぎ立てた。円に飲まれたんだ、との兵士達は全身に傷跡ができていた、と言うものだ。

俺はこれを見つけたときにまさかと思った。

（何事もなかつたのではなく人が何人か魔方陣に飲まれたとしてもきずかない可能性がある、現に美月が飲まれたとき周りには何人がいた。でもそいつらは 魔方陣の中には入らなかつた それに美月が消えた後波紋のように黒い何かが広がつていった。あれは魔方陣の中にまでは及ばなかつた。波紋は広がり最終的には地球を一周する。あれが記憶改変のできる何かだつたとすれば説明は一応つく気がする。何人かの兵が覚えていたと言うのも仲間を助けようと近寄つて言つたやつの可能性があるじゃないか）

考えれば考えるほど浮かんでくる推測。そしてその神話の本の最後のほうのページに信じられない記述を発見した。

戦乱は続いていたがその中で黒い円がまた突如出現した。そこには見たことない鉄の鎧を着た人物が立つていた。そいつは片方の軍に味方をしたちまち負けていた戦局を建て直しそのまま相手の国を占拠した、と言うものだ。しかしその後にこうも記述されていた。
その勇者はこの國のものだと言いさらには騎士団長だつたと言つた。そして自分は未知の世界でモンスターと戦い1つの国を救い向こうでいきなり黒い円にとらわれきずいたときにはここにいたのだと。しかし勇者のことは誰も覚えておらず勇者として生涯を終えた、と。（これじゃ美月が帰つても覚えているのは俺だけ・・・いくらなんでも美月がかわいそうだ・・・どうすればいい。どうにかして俺が向こうに行けないか・・・）

そして俺は魔方陣の事を調べた。特に呪喚系のものをだ。そして3つ見つけた。異世界に行く魔方陣と言つものを。どれも古い本に書かれているものだった。

しかし正直言つて俺はこれで異世界に行けるとは考えていなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2725y/>

不幸な俺の異世界戦記

2011年11月6日14時46分発行